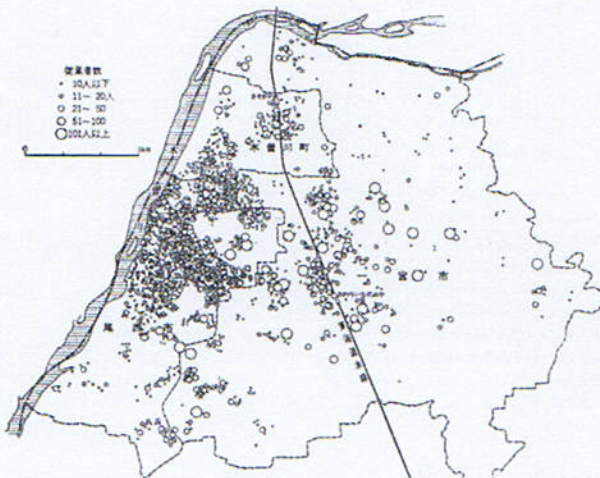


伊藤喜栄塾

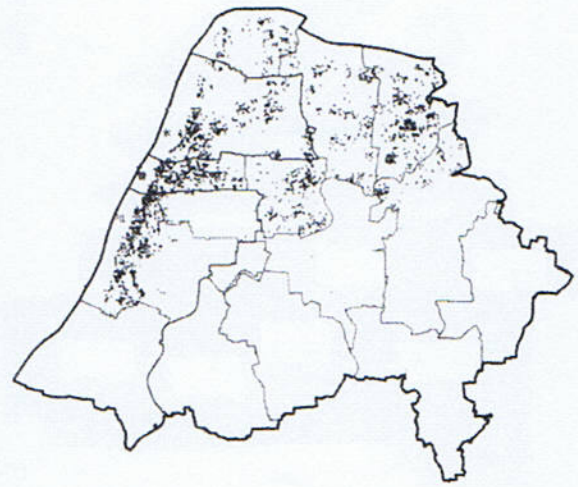
地歴学講座 2013・概要版

1. 現代日本の地域問題と一宮
2. 歴史に学ぶ①：近代から現代へ
3. 歴史に学ぶ②：近代の一宮
4. 歴史に学ぶ③：前近代の一宮
5. 地歴学からのヒント①
：地域づくりの戦略
6. 地歴学からのヒント②
：コミュニティの再考
7. 地歴学からのヒント③
：郊外型まちづくりへの期待

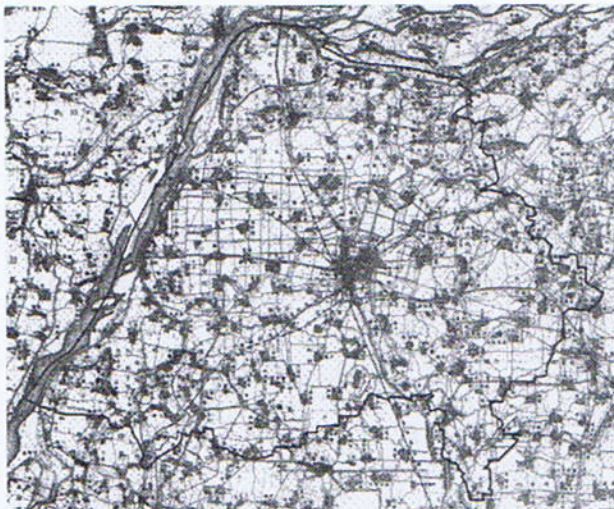
地歴学から考える 一宮の地域づくり



50年前：毛織物工場の分布



現在：鋸屋根工場の分布



100年前：コミュニティ／集落地分布



地形（自然堤防と氾濫原）

1. 現代日本の地域問題と一宮

- ・地域づくり（地域政策）の前提となる「地域問題」は、areaとregionという「地域」の二重性、人間と資本という認識主体の二面性の意味合いを持つ。
- ・また、金融資本がグローバルに動く「現代」では、地域問題においても「近代」と同じに考えることはできない。実は、グローバリゼーションに対応する経済理論は存在しないのである。
- ・かつて、繊維産業集積による地方中心都市として繁栄した一宮市の地域問題の一端は、名古屋都市圏あるいは同一規模の都市との簡単な比較から見ることができる。

●地域問題の二重性と二面性

- ・地域問題は、二重性・二面性の意味合いを持つ。二重性は、areaとregion。地表を任意に切り取ればよいという立場と実態に近い社会的空間が存在するという立場の違い。areaの場合は、スラムとかゼロメートル地帯とかを抽出して、それに対応して手を打てばよい。地域格差ということにウェイトが掛かってくる。他と比べて平均以下のところが地域問題となる。要するに「問題地域」ということである。一方、regionの方は、まん中があって、周りに小さな固まり、あるいは多核心型でもいいけれど、こういう「空間的統合」が上手くいっているかどうか地域問題となる。例えば、一宮市のバスに関して言えば、一宮を中心とした尾張北部の空間的統合の基礎を持っている。それが上手く運営されていれば評価に値する。それが、路線によって利用者数、運行頻度が大きく異なるようでは、全体のまとまりについて、市民は公平な選択ができない。大事なことは、どちらの地域を頭に置いて、地域問題を考えるのか。areaならば数量的な較差、regionを前提とすれば、空間的統合（水平的統合ともいう）。
- ・もうひとつの二面性について。地域問題の認識主体、つまり誰が問題とするのかであり、人間、生活者だろうと考えるがそうではない。資本主義社会では、その主体は資本にあり、人間が主人公ではない。アダムスミス以来、空間編成の主体は、産業であり、企業であり、資本である。それをおかしいと思っても、メカニズムがそうになっているので、異を唱えるには、相当のエネルギーを要する。それが、労働運動、社会運動、市民運動のかたちをとる。公的セクターも、市役所、県、政府であれ、資本の方に顔を向けている。教育、マスコミもそうである。市場メカニズムが前提だから、カネを儲ける、儲けたカネを基礎にする、これ抜きにして社会の存立はない。
- ・では、間に入って調整するのは誰なのか。公的セクターであり、政府、市役所、県庁などである。小さな政府

というのは、その調整役を弱めていくことに他ならない。公的セクターは最小限必要とすれば、われわれがすべきことは、それが仕事をしているかどうかをチェックすることであろう。そうしないと資本の方に流されてものが決まってしまう。

●現代とは

- ・近代は、産業革命以降に出てきた産業資本主義を中心とした市場経済のメカニズムで、現代はそれとは違う。ひとつは、資本主義社会の主体がものづくりから、金融資本に代わっていることがある。また、近代の経済が前提としているのは一國経済であり、閉鎖経済ではみ出した部分は政府がチェックできるというもの。しかし、金融資本は、それでは飽き足らず超えていく。そして、グローバリゼーションと結びつく。
- ・金融資本が出てくるのは、第一次世界大戦後の世界恐慌のころ。しかし、1930年代以降を現代とは言わない。社会主義の国が出てきた。それがなくなったのは1989年のベルリンの壁。これによって、金融資本は自分の思うように動かせるフィールドを持った。したがって、現代といえるのは、ベルリンの壁崩壊以後と考えてよい。

●地方中心都市一宮の所得水準（右頁グラフ参照）

- ・濃尾平野の市町村には、所得水準が低くて、名古屋への依存度が高いことが共通している。一宮は名古屋大都市圏の中で、同心円的にならず、マイナス面を拾っていることになる。
- ・他の大都市圏の中で、一宮と同規模人口の都市としては、東京圏では柏市、町田市、藤沢市、関西では豊中市、高槻市などがある。所得水準を見ても、みな一宮市より数値が高い。どうして、そういう較差が生まれるかを考えることが必要である。

fig1 昼夜間人口比率と所得水準

昼夜間人口比率は、中心性が高ければ、1（100%）を超えるとよい。逆にベッドタウンならば低くなる。名古屋30km圏の市（町は割愛）を、G1からG6に区分した。一宮はG4に入るが、G4の条件はあまりよくない。昼夜間人口はちょっと100を上回り、所得水準は320を下回っている。名古屋のベッドタウン化が進みながら所得水準の高い人があまりいないということ。

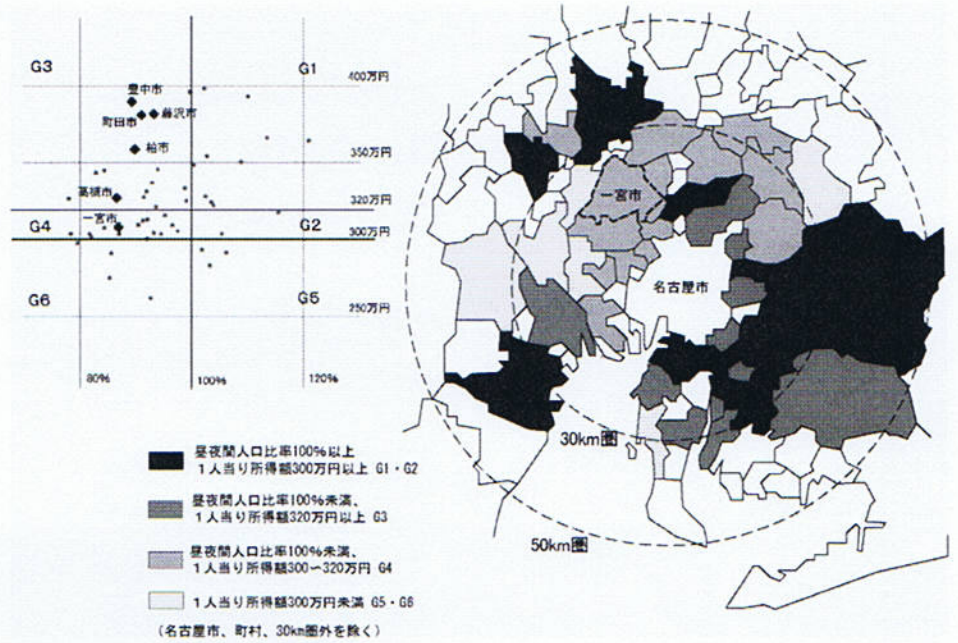


fig2 人口増減率と製造業出荷額の増減率

一宮はG3に位置する。人口は増えているが、工業が伸びていない。人口が増えて、工業が発達し、所得水準が高い人が多くなるのが望ましいとすれば、一宮は人口だけが伸びている。稲沢もほぼあてはまる。東海道線の名古屋から岐阜にかけてのラインは、名古屋大都市圏が発展している時に、手を打つのが遅れたということになる。

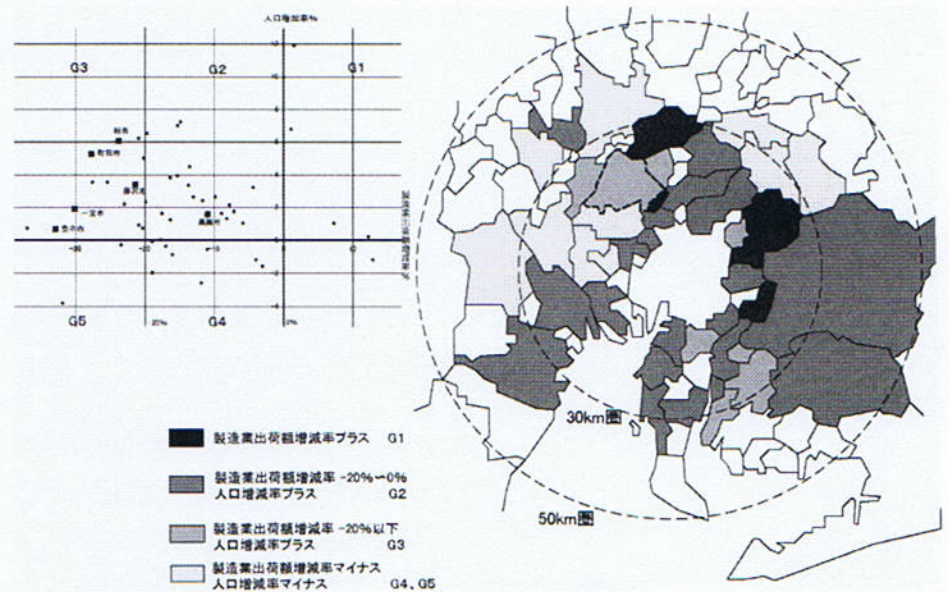
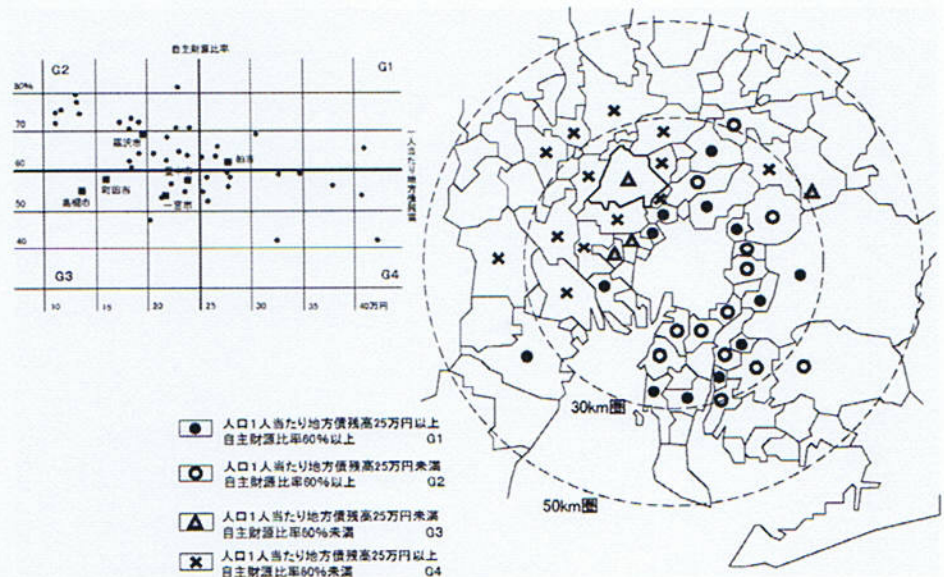


fig3 財政事情(自主財源率と地方債残高)

市に施策を打つためのお金があるかどうか問題になる。財政事情は、普通は財政力指数で比べるが、それよりもダイレクトに、自主財源を持っているかどうか、借金があるかどうかを見た方がわかりやすい。一宮はG3に入っている。自主財源の比率が60%を切っている。1人当たりの地方債残高は約22万円。だから借金はあまりしてないが、その代わりに、自主財源も少ない。



2. 歴史に学ぶ ①：近代から現代へ～地方中心都市の繁栄から衰退へ～

- ・一宮の毛織物業の繁栄は、近代から現代へと転換する 1980 年代あたりまでと考えられる。同時に、「地方中心都市」として、人口規模、拠点性等を持っていた。
- ・繊維産業はグローバルな競争の中、非常に厳しい環境に置かれてきたが、大きな産業集積地を形成した一方で、地場の商業資本、繊維関係の企業が成長しきれなかったことに衰退の一因が認められる。
- ・また、名古屋都市圏の 20～30km 圏として、人口増加とともに郊外が形成されていく時代において、鉄道駅の新設及び関連開発などもなく、公共、民間とも戦略的な都市発展の取組みが欠けていた。

●地方中心都市「一宮」の衰退

- ・一宮を中心とした毛織物が世界的に評価されていたのは 1980 年代までであろう。1980 年代には、中小企業論の中で「サードイタリア論」が流行った。ミラノを中心とした北イタリアは大企業、南は農村地帯、それに対してローマとミラノの間のフィレンツェを中心とした中小企業の産地、それが「サードイタリア」として日本に紹介された。その時、プラートという毛織物のまちと比較して紹介されたのが、毛織物の産地としての一宮。だから一宮は、80 年代までは尾張の中心としてだけでなく、毛織物の看板を持っていた。それが社会主義が消え、世界がひとつになって行く、言い換えればグローバル化が進展する中で、どんどん劣化していった。
- ・「現代化の中での一宮」のポイントは何か。県庁所在地に成り得る資格を持ちながら、自覚することなく、別の方向に向い、産業都市に変わってしまった。あるいは、自覚を持って戦略という中で生きていけば、もっと違う産業都市に成り得たかもしれない。それをやり損なっているのではないかと思う。

●毛織物衰退の背景

- ・東海道線沿いの一宮に日紡、東洋紡、片倉などの大きな繊維工場ができて繊維商社ができる。しかし、買継商人は手数料稼ぎ。要するに自己責任で仕入れて、相場を見ながら販売するような本物の商社、問屋が弱かった。自分の責任で商売できるほど、商業資本が大きくならなかった。大阪の指示に従っていた。本町筋の豪商が、繊維の商人に肩代わりをしてもらおうと思った時に、繊維関係の商社がそこまで成長しきれなかった。それは、戦前の日本の経済学者は、商社にくっついて仕事をすることは悪いと言っていたことも関係している。問屋制家内工業で商人に搾取されるという。しかし、責任を持って企画し、営業する役割のセクションは、イギリスもドイツもイタリアもどこも手放していない。

●名古屋都市圏の中での一宮

- ・鉄道を通して見た場合、一宮は非常に中心性が高く、決して名古屋の付属物ではなかったことがわかる。岡崎、豊橋よりも中心性が高かったかもしれない。尾西線には戦後まで蒸気機関車が走り、貨物に使っていた。尾西線は運動の仕方によっては、国有化されていてもおかしくないような重要路線だった。東京で言えば、八王子と横浜をつなぐ横浜線のようなもので、四日市と岐阜、一宮を結ぶ重要な路線だった。四日市への貨物輸送を円滑化する方法としてあったはずだが、一宮も岐阜もぼんやりしていた。いま、名鉄のまま、弱体化しつつある。
- ・名古屋の市役所を起点として、0～10km 圏の人口が減って、10～20km 圏の人口が増えていったのが昭和 30～40 年代であり、これが名古屋の郊外が形成されていく時期である。郊外の人口が増えて、名古屋市街地の人口の伸びは止まった。名古屋周辺の都市では、名古屋圏の郊外化を上手く使ってまちづくりに活かすことが問われた。岡崎は、まあ成功したといえる。だが、一宮はぼんやりしていた。
- ・実はこの時期は、国鉄の民営化と重なってくる。従来、通勤客は名鉄任せで、国鉄は遠距離交通の要と考えられて、棲み分けができていた。しかし、国鉄は民営化されて利潤を上げなければいけなくなり、通勤のダイヤを拡充した。この時、一宮は何をしたか。駅ビルはそのまま。高架にはなった。しかし、駅を増やさなかった。一宮の南には、市街地の過密を分散させる政策から、せんい団地をつくったが、駅を持った拠点ができなかったのが残念である。これができていけば、稲沢との関わりも変わってきただろう。中央線、関西線、東海道線の岡崎方面も、3km 間隔で駅がある。名古屋から岐阜の間には、私が生まれてから増えていない。全国で郊外が形成されていく時代に、発展の機会を逸した感がある。

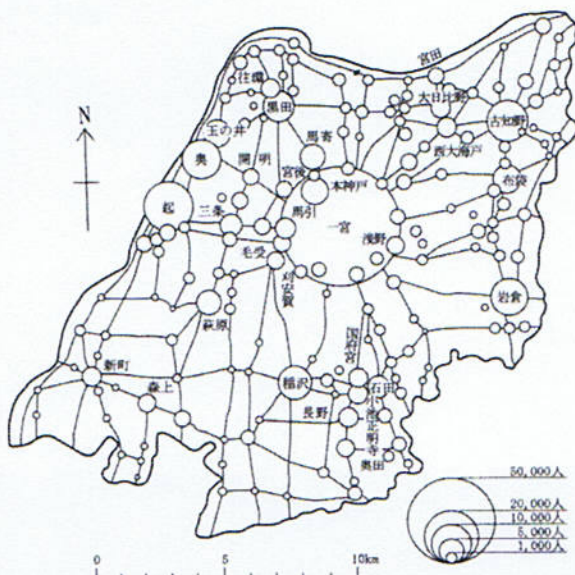


fig.4 一宮都市圏に含まれる中心地の人口規模

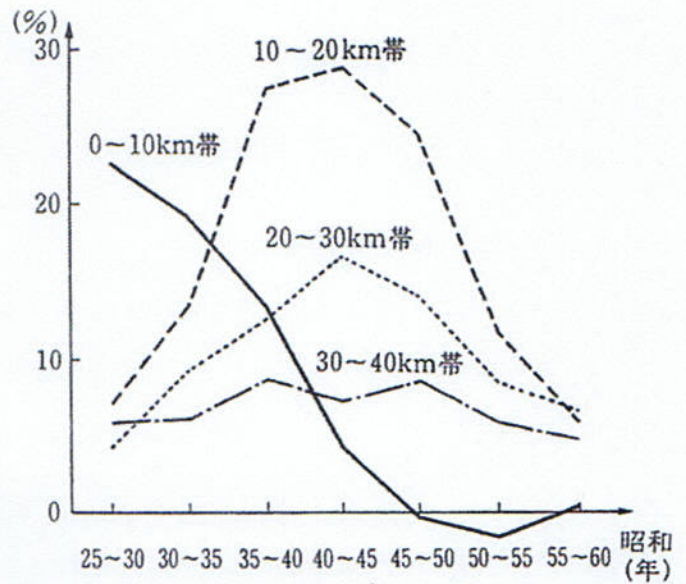


fig.5 名古屋都市圏の距離帯別の人口増減推移

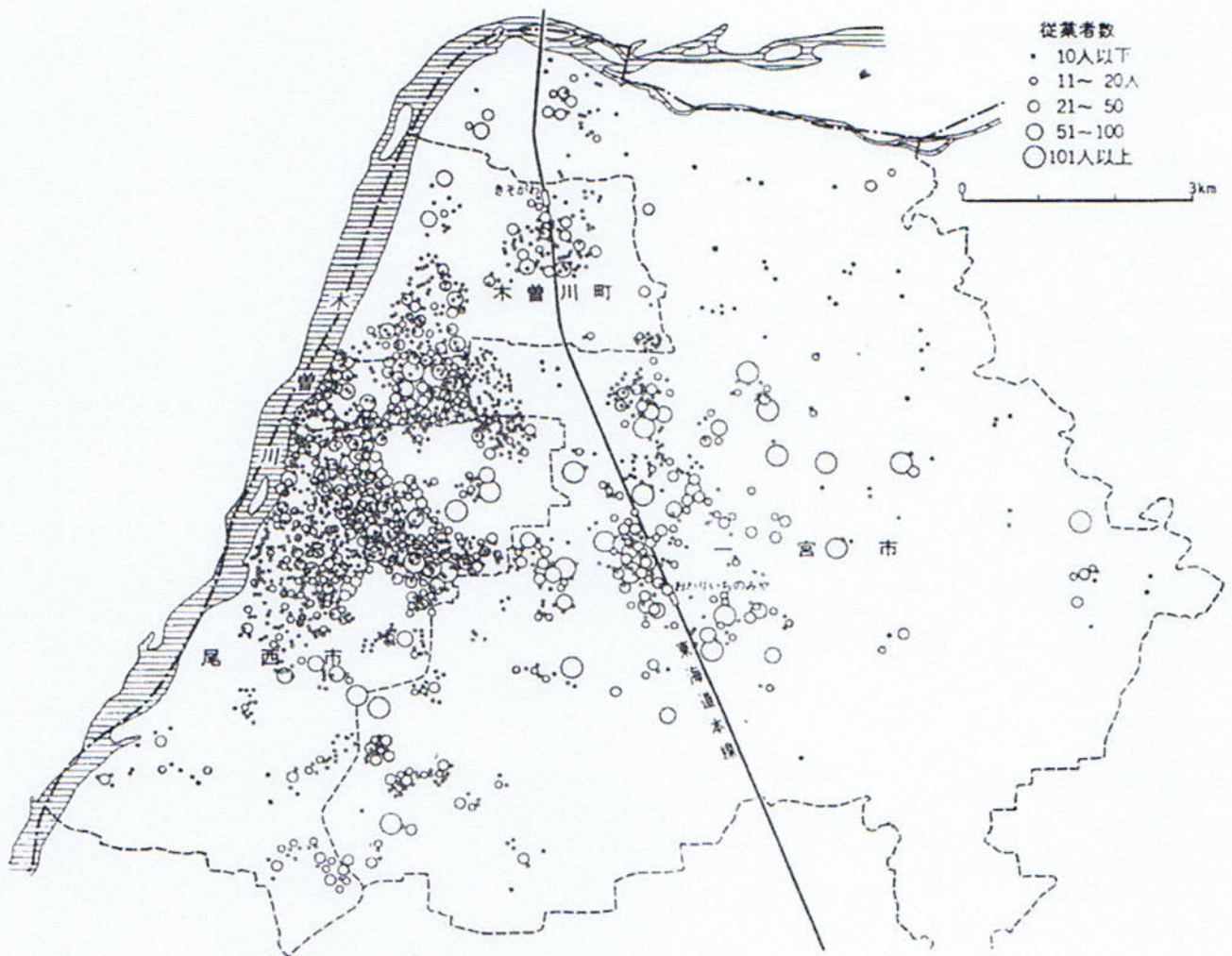


fig.6 一宮市における毛織物工場の分布(1955年)

3. 歴史に学ぶ ②：近代の一宮～毛織物業の隆盛と地域づくり戦略～

- ・一宮の繊維産業の発展は、濃尾地震後の綿から毛織への転換、第一次世界大戦を契機としたスーツ地の開発という2回のイノベーションに基づく。地元の開発意欲を背景に大阪商人と連携する知恵が存在した。
- ・四日市港が整備されて羊毛の輸入を担い、尾西線を通して弥富から一宮に運ばれた。港湾、鉄道などの都市施設の整備が濃尾平野の繊維産業集積の形成を促進した。
- ・また、官サイドでも、1930年代に一宮を中心に放射状に県道の整備が進み、世界恐慌対応の失業対策事業として道路の2車線拡幅されるなど、地方の中心都市形成に立った地域づくりの戦略が見られた。

●毛織物業のイノベーション

- ・一宮の毛織物は、着尺から洋服物に変わるときに苦労している。当時、国産技術ではスーツ地はできなかった。名古屋に收容されていた青島のドイツ居留民に教えてもらった経緯がある。染色整理の技術は、ドイツの居留民が愛知工業に教えて、そこに学んだ。艶金は、直接、ドイツ人を雇って教えてもらった。その知恵を授けたのが、大阪の芝川商店であった。第一世界大戦で海外からの輸入が途絶え、国産で対応しようとした時に、手を挙げたのが一宮ではないかと思う。織る方はわかっていたが、スーツ地に仕上げるのが難しい。芝川は設備投資まで面倒をみたようだ。当時には、そういった知恵があった。

●一宮の街づくり戦略

- ・大戦前のまちづくりは、市当局、商工会議所、あるいは商店街の豪商たちだろうか。ひとつの戦略を持っていたような気がする。地方中心都市としての自覚を持ってまちづくりがされたと思う。まず、1920年ころに市制を引いた。同時に女学校を作り、中学校(第6)を誘致した。また、東海道線に急行を停めたことは大きい。この繊維は名古屋ではなく大阪に関係しており、大阪商人が来られるように急行を停めた。当時の急行は、いまの快速とは格が違う。濃尾平野の中心にあつて、名古屋は関係ないと言わんばかりの自負があり、その中心性を盛り立てるような市政を行っている。
- ・本町商店街については、1935年ぐらいの古い街並みを若干記憶している。小学校のころに、いまの近代的な商店街ができた。今となればもっと歩行者型でもよかったように思うが、当時はハイカラな街並みだった。また、一宮から放射状に延びる県道の整備もこの頃である。1935年前後、世界恐慌対応の失業対策事業の中で1車線から2車線に拡幅された。舗装されたのは戦後のことである。バスは1925年ころ、伊藤自動車という東一宮

の緑のバスが濃尾平野では一番最初である。こういったことから、濃尾平野の中心都市として他とは違った都市に育てるといった戦略があったように思う。

●都市施設整備と毛織物業集積地形成

- ・近代的な都市施設、電気、ガスなどをいち早く整備し、それが濃尾平野を世界有数の繊維産業集積地に変えたと言える。一宮のみならず、西は大垣、南は四日市、東は江南にいたるまで、濃尾平野全体が繊維産業の大企業、中小企業で埋まった。これに匹敵する集積地はヨーロッパでは、イギリスのヨークシャー、ランカシャーぐらいしかない。それぐらい凄い産業集積である。
- ・工業地帯と違い、産業集積は自らが選んで工場を建てたという意味合いがある。なぜそうなったかを抜きにして産業集積を語っても意味が無い。アメリカの経営学者が言うトランザクションコスト (transaction cost/取引費用)。つまり取引関係が能率よく高密度に発達していったものと考えられる。着尺物(着尺セル)で毛織物を始めた一宮。作っているのは起、奥町で、大阪商人の影響が大きい。それが核となって、稲沢に栗原紡織(後の大同毛織)や日紡、東洋紡、片倉製糸等が出てくる。羊毛の輸入のために四日市港が整備される。名古屋港は天然の良港ではないので整備にカネがかかる。それで、四日市で荷揚げして、弥富へ運ばれる。だから、尾西線は利用価値が高かった。また、地下水は豊富で、染色整理にも有利であった。大江川(富田用水)等の農業用水もよく利用されていた。地方中心都市としての都市施設整備が結果的には濃尾平野の繊維産業集積の基礎となっていることはあまり指摘されていない。

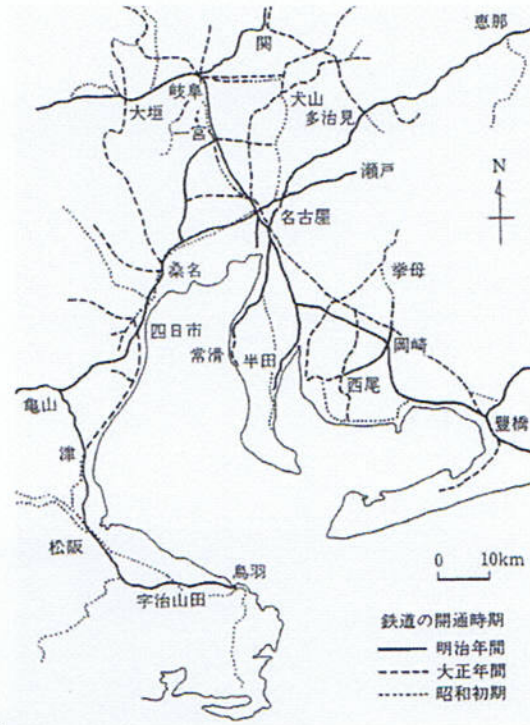


fig.7 昭和初期までの鉄道開通

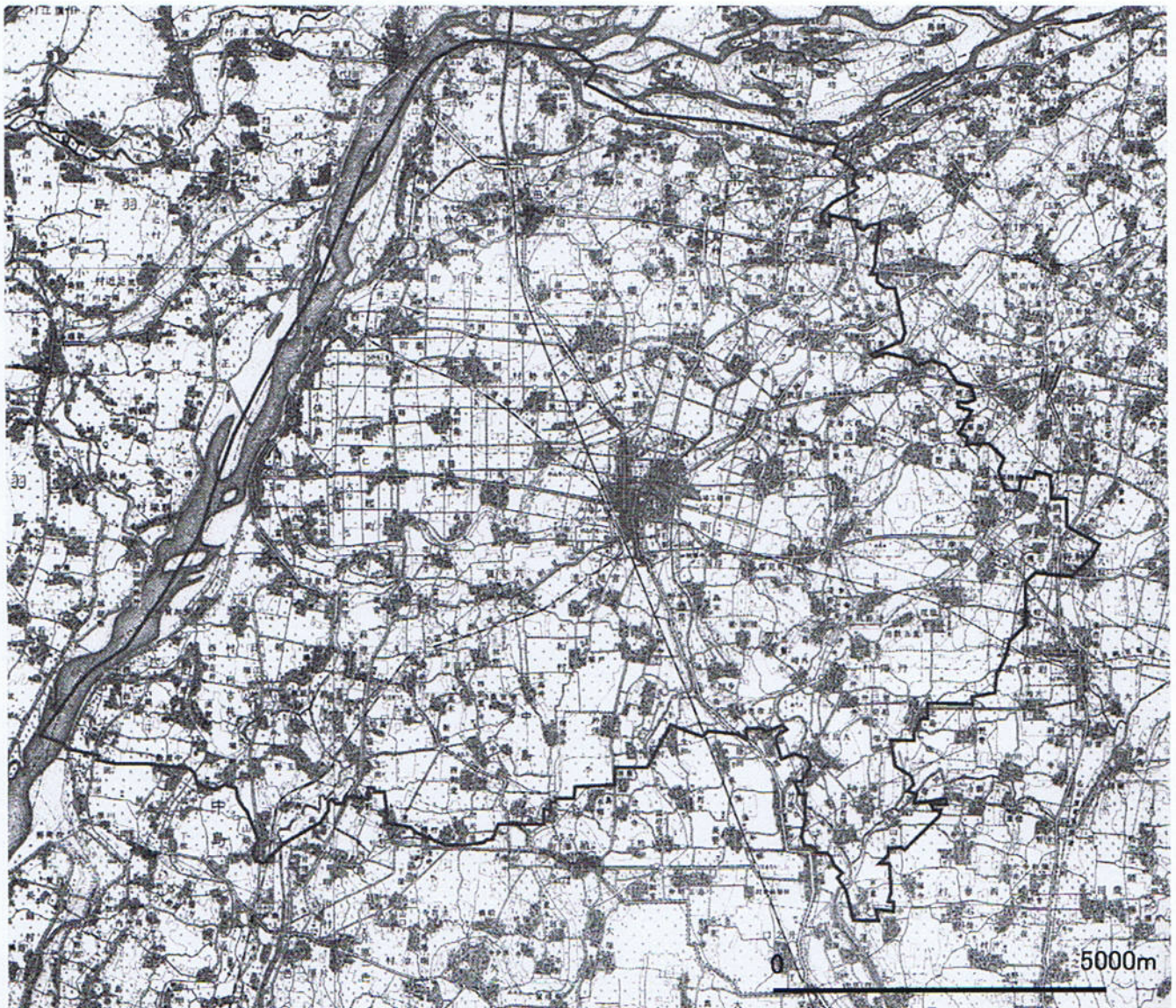


fig.8 尾張西部地域の集落地分布(1920年頃)

4. 歴史に学ぶ ③：前近代の一宮～三八市の発展と地理的環境の活用～

- ・濃尾平野の農業生産力は高く、その中で古くから一宮は拠点性、人口規模を持ち、18世紀初頭には真清田神社の門前に三八市が始まり、濃尾平野の中心地として発展してきた。
- ・一宮を中心とした尾西地方の綿織物は、18世紀末に京都から織物技術が伝わり、19世紀に入り綿作の広がりとともに発展してきた。
- ・一宮は尾張藩の端っこに位置し、また、木曾川の川筋にあって幾度となく洪水の被害を受けてきたところだが、そのような環境を活かして、地域をつくってきた。

●濃尾平野の集落地形成

- ・濃尾平野は広いけれど、真っ平らではなく、でこぼこがある。尾張藩ができて、治水工事がしっかりして始めて、どこにでも集落ができる条件が整った。古い集落と新しい集落がある。新しい集落は、雑木林などの残っているところを開墾してコミュニティをつくっていく。その際、水害の防御を考えて、与えられた条件の中では一番高いところを選んでいく。その周りを可能な限り同心円的に開墾している。

●地方中心都市「一宮」のルーツと三・八市

- ・封建時代の濃尾平野、葉栗郡と中島郡の村の人口が、『寛文村々覚書』からわかる。尾張藩は、17世紀の終わり、村をひとつひとつ調べて記録に残している。世界にも例がないと思われる。それほど尾張藩の統治能力は高かった。村それぞれの人口、石高、特産物などが記されている。その中で、一宮（一之宮）は490世帯でほぼ3,000人の人口を数えた。寛文時代は1661年から1673年。その後が元禄時代であり、当時の将軍は家綱。一宮に匹敵する大きさのところはない。戸数が100を超えるところは少なく、一宮は突出して大きいことがわかる。
- ・一宮は、戦国時代から、市町（マーケットタウン）として相当の地位にあった。世界的にも、多くのまちの起源はマーケットタウンである。日本では、濃尾平野、関東平野のような大きな平野ではマーケットタウンが成立した。一宮では門前町が基礎となっている。
- ・尾張藩は優遇されて、治水なども早く進められ、安定した生産力があり、物々交換に出す農産物も村ごとに特色があった。一方で、尾張藩の主力は一宮ではない。尾張藩の商人は一宮あたりの繊維産業にあまり着目していない。むしろ知多半島の白木綿、尾北の生糸の方に力が入っている。なぜなら知多半島の港から江戸に送れるからである。この地方が綿作、そして綿織物を基礎とした織物産地として全国的な知名度を持つようになった

のは第一次世界大戦後だと思う。その前までは、各地にある中小の先物の産地に過ぎなかった。尾張藩の庇護はあまり受けていない。綿に加えて、北の養蚕、南の野菜などを荷車引いて集散するには三八市の位置はちょうどよかった。

●濃尾平野の端に位置する立地条件と自然環境の活用

- ・江南は桑で生糸、尾西は綿で綿織物が主体であった。犬山を頂点にして、半径10km～12kmの扇状地での水田利用は難しい。砂礫質で水の浸透性が高い。したがって、通常は樹木性の作物で農業を行う。しかし、それを自然が決めていると考えるのは間違いで、どう使うかは人間側の問題である。濃尾平野の養蚕は、世界恐慌で下落してダメになった。生糸のアメリカ輸出ができなくなり苦慮した。桑の他にこれといった作物がなかった。いま果樹をやっているのは、かつて桑をつくっていたところである。扇状地だから、一元的に桑、養蚕という訳ではなく、どう活かすのか、農村の知恵の問題であり、また、商人が売ってくれるかどうか大きいといえる。
- ・江南は扇状地だが、一宮は自然堤防が多い。自然堤防とは、河川流路の変更の中で土砂が堆積して小高くなったところで、これを利用して治水に役立てている。都市化する場合に問題になる。扇状地は農業サイドからは生産性が低いかもしれないが、住宅、工場利用は埋立なくてもよいので都合がよい。ところが、一宮の方は、高いところと低いところが入り交じっている。低いところを埋め立てて住宅を建てているところは地震の時に弱いと考えられる。また、水害にも弱い。江戸時代からある古い集落は経験的にこういうところを避けて村をつくっており、安全性が高いといえる。

- 市場地名
- 市地名
- ⊙ 宿地名
- 町地名
- ⊙ 文献に見える地名
- 標高50m以上の山地
- ▨ 扇状地・台地
- ▨ 平拓地・埋立地
- 三角洲
- 国界

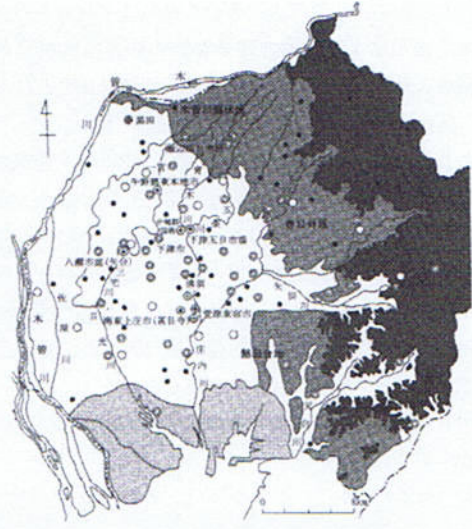


fig9 濃尾平野の村落市場の分布



fig10 尾張西部の主要な市

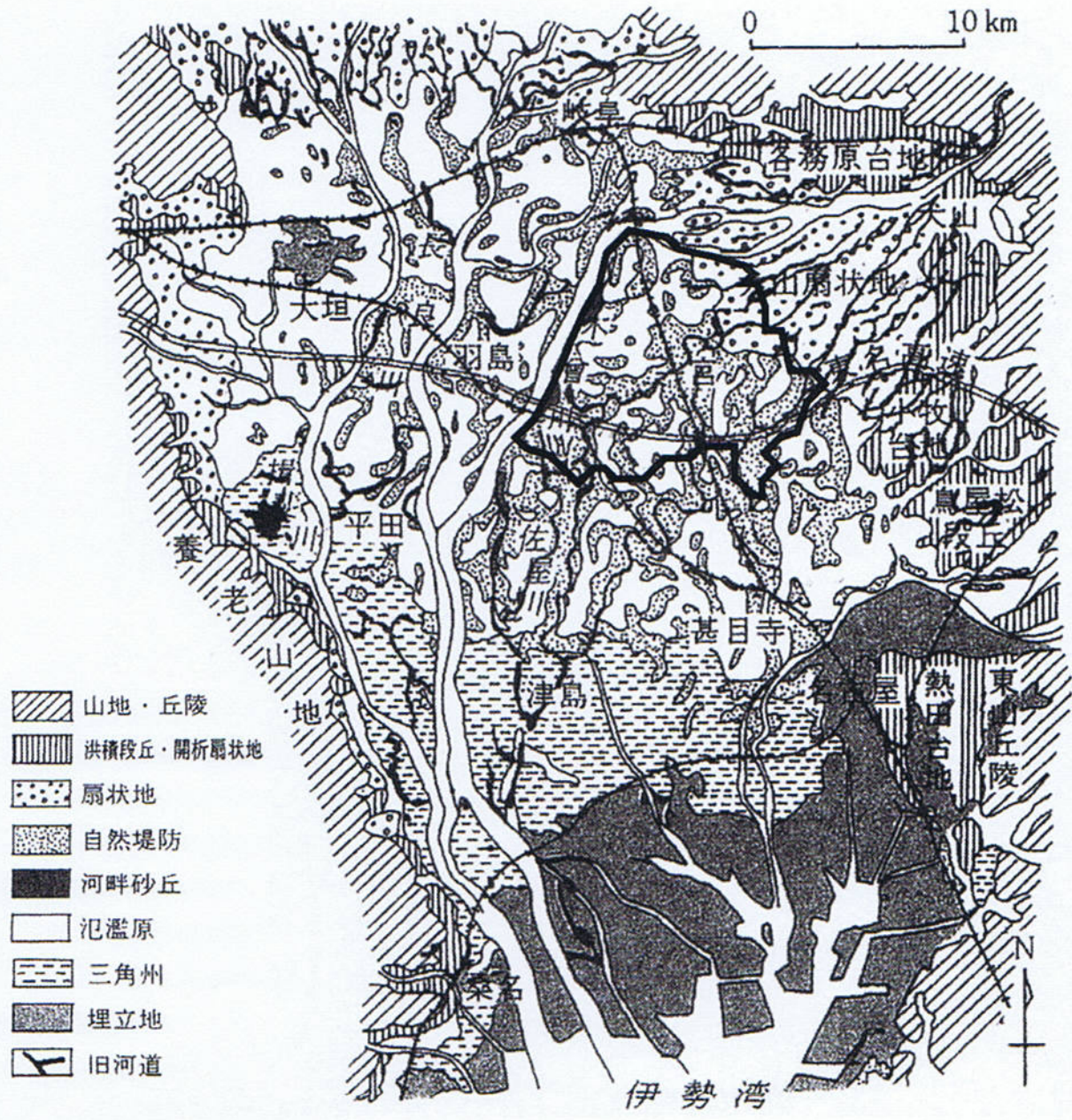


fig11 濃尾平野の地形

5. 地歴学からのヒント ①：地域づくりの戦略

- ・長い目で考えるのが戦略であり、ショートレンジで考えるのが戦術である。地域づくりには戦略が重要であるが、日本人はその訓練が上手くできていない。地歴学は長期的、戦略的な視点に立つものである。
- ・一宮が名古屋の衛星都市でなく、独立した都市としての産業戦略を考える上では、所得を生み出すベーシック・インダストリーが重要である。毛織物産業は1980年代まで、その役割を担ってきた。
- ・製造業の空洞化が進む中、毛織物産業の再生は可能だろうか、あるいは新たなベーシック・インダストリーの創出をどう考えればよいのだろうか。

●戦略と戦術

- ・長い目で考えるのが戦略であり、ショートレンジで考えるのが戦術である。まちづくりでは戦略が重要である。何年も先の成果を考えて投資をするという考え方を身につけなければいいまちづくりにつながらない。市民の方々は、取りあえず困っていることを考えるので、ものごとの見方が短くなる。日本の場合、戦略を考えるのが苦手ようだ。安倍さん、橋下さんを見ていても、戦術としては、大きく間違っていないとしても、30年先にアメリカ、中国、韓国との関係を考えて大丈夫かと思うことが少なくない。日本人は、ストラテジー（戦略）の訓練が上手くできていない。幸いにも私は、名古屋大学で、学生三人に対して先生三人という贅沢な教育環境で、戦略、戦術について学ぶことができた。それが「地歴学」の礎を築いていると思う。
- ・19世紀ドイツの政治家ビスマルクのことばに、「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」とある。歴史に学ぶことが、戦略を学ぶ大きな手掛かりになる。一宮に限らず、どこのまちづくりを考える場合でも、産業革命が重要な歴史的エポックとなると思う。歴史は多様なので、キーワードをとらえる必要がある。自分の興味と合わせて取捨選択しなければならぬ。私は、産業革命とエコロジーの持つ意味合いを強く意識した。アダムスミス以来、生活を規定するエコノミーに対して、それ以前の生活はエコロジー（生態学）としてとらえられる。生態学という学問は、自給自足で経済を成り立たせるとどういう世界ができるのかを見る意味で切れ味を持つ。産業革命以降の便利な社会が本当にそうなのかを見直す手掛かりとなる。蒸気機関が発明されて以降、文明は進歩してきたが、250年足らずで、資源という視点から見れば、地球上の各地が危機に瀕している。

●独立した都市に必要なベーシック・インダストリー

- ・独立した都市として考えるならば、まず、所得を生み

出す糧は何かが重要となる。専門的なことばで言えば、「ベーシックインダストリー」（あるいは都市を建設する領域）である。次に、生み出された所得がその地域で使われること、つまり内部循環がどこまで進められるかを考える必要がある。一宮は、毛織物を中心として、戦後しばらくまで、そういう性格を持っていた。しかし、毛織物が輸出産業として発展せず、国内市場に留まってしまった。国内市場の独占によって稼いだが、それを地域内で循環させる仕組みづくりが成功しなかった。例えば、毛織物で稼いだお金は一宮で使われず、岐阜で使われてきた。これまで、一宮市で消費させる工夫を行政も商工会議所も取って来なかったと思う。

- ・「ベーシックインダストリー（基礎産業）」に対して、付随して起こってくる産業を「ノン・ベーシックインダストリー（あるいはシティ・フィーラー／都市を満たすもの）」という。この組合せを考えることで、産業を考える違った手掛かりが出てくるであろう。いわゆる独立した都市は、両方の組合せが上手くいっている。例えば、県庁所在都市はまあまあ上手く循環しているといえる。それは、政府から直接落ちてくるお金が多いことによる。それがベーシックインダストリーの代わりになっている。米軍、自衛隊関係は、経済的には同じ効果を持つ。また、高齢者福祉への特化も、ベーシック／ノン・ベーシックの考え方から想定できるが、福祉政策がどこまで拡充できるかによるであろう。また、日本ではあまり成功しなかったが、大学誘致がベーシックインダストリーの役割を果たす。外国の大学の違いは、寮を持っていることである。これに、大学をサポートする仕組みがついてくるので、大きな雇用効果を生む。日本では大学紛争を契機に、寮を切り離してきた。これから大学誘致でベーシックインダストリーを育てるとすれば、国際化しかない。アジア・アフリカに対して、欧米とは違う日本のホスピタリティで、いい教育を提供することが考えられる。秋田国際教養大学、大分の立命館アジア太平洋大学

などはその成功例といえる。

●名古屋都市圏の中でどう考えるか

- ・一宮の先々を考えた場合、戦略として毛織物の集積がまだ取り戻せるのか、そして毛織物と濃尾平野の中心という両翼の Docking が上手くいくかひとつの課題である。もうひとつは、名古屋大都市圏の中でマンションのまちとして、なるべく所得水準の高い人を呼び込むという戦略である。ただ、ものづくりの拠点、産業首都名古屋については、あまり楽観的になれない。名古屋自体はまとまって、周りは面倒見切れないということになれば、名古屋依存のまちづくりは難しい。やるならばもっと前にやっておくべきだった。例えば、東海道線の駅である。大正ぐらいから、名古屋から岐阜の間に駅がひとつも増えていない。東海道線の岡崎の方、また、中央線、関西線はだいたい2.5kmから3km間に駅が作られてきた。駅をつくと、土地利用のシステムが変わる、使用価値の面でも変わる。また、地価が変わり、交換価値も変わる。資産価値が高くなれば担保能力が高くなるから、新しい事業をする基礎になる。金融資本の時代ということでは、やる気のある人にはいろいろな可能性が出てくる。
- ・大都市圏におけるベーシックインダストリーが開発研究にシフトしていることがうかがえる。ものづくりそのものは、低賃金で利用できる場所に移っていく。かつて、ソニーが一宮に進出したのは、繊維産業の女工さんを安く使えるだろうという判断であったと思われる。ソニーが進出したところは、だいたい繊維産業の盛んなところだったが、繊維産業がダメになってしまったので、日本人の低賃金労働を雇うことができなくなった。名古屋大都市圏において、一宮は、R&D (research and development、開発研究) の空白地帯になっている。小牧、春日井、名古屋市内が多く、西三河に比べて一宮地区は、新しいレベルの高い技術者を呼び込むという面において弱い。R&D の中には大学も含まれる。しかし、今からでは大学誘致は手遅れ。岡崎、豊橋は大学を持っている。戦前まで遡れば、彦根高等商業学校が出来た時に、なぜ、一宮に経済専門学校、高等商業を誘致しなかったのかと思う。繊維が好調だったので、ものづくりが先行して、商売は二の次、大阪商人に任せればよいと思っていたのだろう。しかし、それが戦後になっていろいろと影響が出て来る。戦前は濃尾平野のサブの中心で、岡崎に匹敵するような中心性を持っていたのだが、その中心性を認識し、活かすという面でぼんやりしていたと言わざるを得ない。一宮は、名古屋大都市圏のサブセン

ターであったが、中心性の自覚に乏しかった。1980年代の終わり頃、国鉄の民営化とともに、名古屋大都市圏の郊外の性格が強くなって飲み込まれていった。しかし、成り行き任せにしていたため、後のまちづくりに支障が出てきた。サブセンターなりの新しいベーシックインダストリーをどう育成するかというアイデアがなかった。



fig.12 名古屋都市圏の交通体系

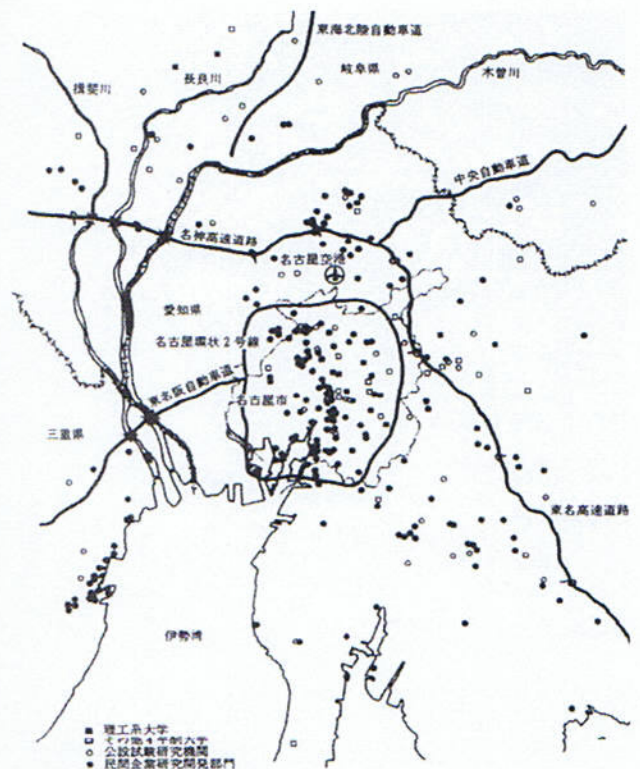


fig.13 大学、開発研究機関の分布

6. 地歴学からのヒント ②：コミュニティの再考

- ・ 東日本大震災以降、コミュニティに関する議論が増え、その概念に混乱が見られる。絆（きずな）は、本来コミュニティではない。コミュニティには、地域性、共同性とともに異質性が必要である。
- ・ 地歴学的には、縦軸に農村型・都市型、横軸に伝統社会・近代社会を置いて、それぞれの遷移過程を含めたコミュニティの概念整理が重要となる。
- ・ 近代社会の都市型としての「ビジネス・コミュニティ」が肥大化した「都市圏」とサブ・コミュニティの「近隣」の2面から、一宮のコミュニティを考える必要がある。

●Communityとしてのコミュニティ

- ・ 3・11以降の議論では、カタカナのコミュニティの意味が広がったというか、あいまいになってきた。絆＝コミュニティ、あるいはコミュニケーションの変形、類語としてのコミュニティの使われ方が多くなっている。これでは大変なことになる。
- ・ 社会学辞典にある根本は「地域性」と「共同性」の二つ。共同性だけだとソサエティと同じ意味。われわれは、社会と言うとき、人間と人間の共同性を意味する。それに対して、コミュニティは地域性という限定性を持っている。だから、地域性の限定がないものは、英語のコミュニティにはならない。
- ・ 共同性にも二つ意味がある。同じようなものが共同する「類似性」ということ、また、異なったものを含めてひとつとなる「異質性」ということ。コミュニティやソサエティの共同性は、この異質性にウェイトを置いている。似た者だけが集まっているのでは、必ずしもコミュニティやソサエティには合わない。

●地歴学からのコミュニティ試論

- ・ 私の考えるコミュニティは右表に整理した。縦軸に農村型と都市型、横軸には伝統社会と近代社会を置いた。伝統社会は自給自足+ α （プラスアルファ）、近代社会は市場経済+ α （プラスアルファ）。伝統社会は基本自給自足で、余ったら売る。市場経済社会にも自給自足部分がないわけではない。実は、この伝統社会と市場経済社会の二つの間に現実の姿がある。ここでは「遷移」と表示してある。実際は、突然、I型からII型になるわけではなく、この「遷移」に最もリアリティがある。この間の橋渡しのところをどう認識し、どう処理するかが社会科学では非常に重要なことである。

●ファクトリーコミュニティ、ビジネスコミュニティ

- ・ 産業革命によって、商品生産が増大した。その結果、

コミュニティのメンバーが人から企業に変わっていく。そういうことを表現しているのが、「ファクトリーコミュニティ」ということばである。始まりは、アークライトによるもの。近代紡績業の始まりで動力は水車。生産のためには資本家、労働者の日常生活が必要で、ここで労働者の街ができる。

- ・ 生産活動がどんどん活発化し企業が集中する。蒸気機関がこれを可能にした。蒸気機関が中心になって企業が一カ所に集まるというムーブメントが70～80年続く。その後、電気になる。こうしてできたものを「ビジネスコミュニティ」と言う。日本で言う工業地帯は、実はビジネスコミュニティと言える。ビジネスコミュニティは、近代的な都市や大都市が相当する。
- ・ しかし、ここではコミュニティの主体が企業になるから人間が抜けている。だから、国の政策もこのように集まってきた企業が立ち行くようにバックアップすることが都市政策の中心になっていく。そう考えると、今の公共投資もどういふものかがわかってくる。

●サブ・コミュニティとしての近隣

- ・ ビジネスコミュニティからコミュニティ問題が発生してきた。都市における貧しい労働者たちの生活、街をどうするかというものである。これがイギリスにおけるコミュニティ問題なのである。これに対して、イギリスでは「近隣区（近隣住区、近所）の整備」に尽きるということになる。労働者、それに類する人たちが住んでいる場所をどうやって良くするか。田舎では、ローカル・コミュニティは伝統社会から引き継いだ「むら」が基礎自治体として機能しているので、そこで決めればよい。しかし、都市ではできないので、小学校区というものを大事にする。日本ではすぐ統廃合で小学校をなくしてしまうが、イギリスは小学校区を新しい都市型のコミュニティとして機能させようと考えている。小学校にコミュニティセンターが併設されて、コミュニティ図書館、ボ

ランティアの語学学校があったりする。

- そういう意味で、日本でも小学校区を見直すことが考えられる。小学校区は、小学生が歩いて通う範囲なので、空間的にも根拠がある。イギリスは小学校区でやっているが、われわれは何を目標にするか。町内会では狭いかもれない。それにいろいろな人間関係やボス支配でやっかいである。再編成をするとしても、いきなり小学校区では問題もあるだろうから、時間をかけてやるべきだろう。そして小学校がなくなったら、空き教室を上手く利用してコミュニティセンターに活用する。そういうことが起こりうると思う。一宮市では、地域ふれあい課、地域協議会など、「地域」を掲げた政策をしているが、まだ中身が煮詰まっていない。

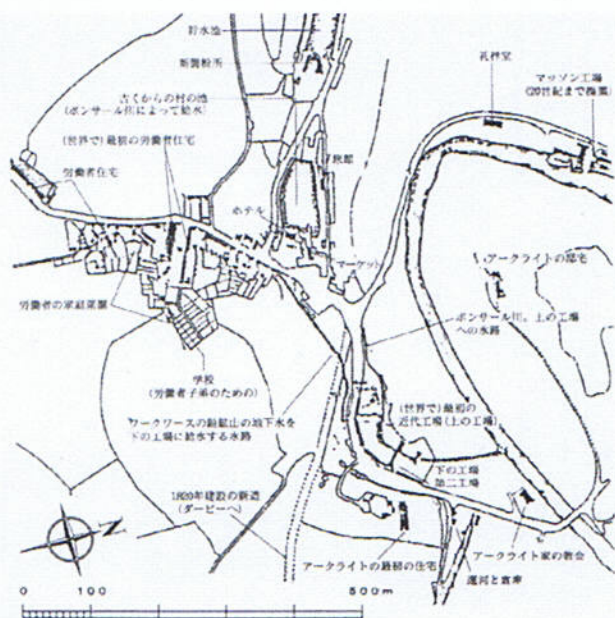


fig.14 アークライトのファクトリーコミュニティ

	伝 統	遷 移	近 代	強 ↑ ↓ 弱
農村型	「むら」：自給自足経済の基礎的空間単位 (うら、はま：海産物を含む自給自足経済) ＝コミュニティ I	<ul style="list-style-type: none"> 兼業農家集住型の「むら」 コミュニティ I＋コミュニティ II プランテーション・ファゼンダ (農業資本家・経営者と奴隷労働) コミュニティ II＋コミュニティ I 	<ul style="list-style-type: none"> 近代的農村：商業的農業者の集住(小農経営)、工業品は都市に依存＝コミュニティ II 近代的農場：資本主義的大農場(農業資本家＋農業労働者)＝コミュニティ II 近代的漁業と水産会社(資本主義的大規模漁業)＝コミュニティ II 	↑ ↓
遷移型	例：古代の都市国家 都市＝市民(コミュニティ II) 食料は周辺の奴隷労働による農場 ：ルネッサンス期の都市国家 都市＝商人(コミュニティ II) 食料は周辺農村の権力的支配(貢納による収奪)	<ul style="list-style-type: none"> 無秩序な農村の都市化＝スプロール 里山資本主義 (里山資源の商品化、里山のリゾート開発) 	<ul style="list-style-type: none"> 郊外(近郊)：農村的景観・環境と都市民の居住・生活＝コミュニティ II(田園都市) 	↑ ↓
都市型	「まち」：食料を自給できない人びとの集住とその空間単位(生存は「むら」に依存・寄生)＝コミュニティ I <ul style="list-style-type: none"> 権力者(とその家族・従者の集住＝「みやこ」型)＝政治・行政都市 → 貢納 宗教者(とその関係者の集住＝門前町・鳥居前町) → 寄進 流通の仲介者(とその家族・使用人等の集住＝市町) → 仲介料(コミッション) 	<ul style="list-style-type: none"> 「まち」の旧市街＋「都市」の新市街 インナーシティ スラム街 等々 	<ul style="list-style-type: none"> 工場コミュニティ(「むら」の中の工場と労働者の「まち」形成) ビジネスコミュニティ(「工場」コミュニティの集積と関連産業の成立、労働者の集住→コミュニティ II) 第二次産業中心のビジネスコミュニティ→工業都市 第三次産業中心のビジネスコミュニティ→商業都市 ビジネスコミュニティの肥大化(都市圏・大都市圏)とサブコミュニティとしての近隣区・近所(neighborhood)機能の再認識 	↑ ↓

fig.15 地歴学からのコミュニティの整理

7. 地歴学からのヒント ③：郊外型まちづくりへの期待

- ・「郊外」の条件は、緑・水の中に住まいがあること。その原形は、ロンドン中心部の西側、公園・緑地の多い上流階級の居住区に見ることができる。
- ・各国とも、産業革命にともなう人口膨張、都市の拡大に対応して、鉄道と合わせてニュータウンを形成していった。日本においては、緑と水の中に住まいのある魅力ある郊外を形成したとは言いがたい。
- ・空洞化の進む一宮の中心部において、緑・水・住まいをセットとした「郊外型のまちづくり」を導入し、その環境を活かした21世紀型ベーシック・インダストリーの創出を期待したい。

●生活空間としての郊外

- ・郊外は、英語で言えばサバープ (suburb)。日本語の郊外が英語のサブバースと同じかどうかちょっと怪しい。名古屋がしっかりした郊外を持っているかと言えば、そうではない。郊外がなぜ問題になるのか。砂漠のオアシスには、緑、水、その中に住まいがある。実は、このセットが郊外の条件である。逆のことは「場末」、*outskirt* あるいは *urban fringe*。
- ・右上図はロンドンのど真ん中。右下図はロンドン全体の緑地・公園の分布を示している。この中に、コモンとパークがある。パークとコモンでは同じような緑地でも発生が違う。コモンは薪や草を取ったりする村の入会地、共有地である。ドイツではゲマインドバルト (共同体の森) という。一方、パークは王がうさぎやキツネ刈りをしていたところを市民に緑地として提供したものなど。私たちがこどもの頃、遠足で行った浅井山公園は東浅井の入会地。所有権は多分、森林平さんで利用権が村に与えられていたのだろう。こういうのは濃尾平野にたくさんあったはず。それがイギリスのコモンの源流となる。
- ・アメリカのボストンには中央に大きな公園がある。ボストンコモンという。余談だが、その一画に教会と墓地があり、そこに厚さが1cmほどしかない墓石がある。これは開拓農民が貧乏だったあかしである。ハーバード大学の前にも大きな公園がある。ケンブリッジコモンという。また、夏目漱石がロンドンに住んでいたところにはクラバムコモンがある。その他、ロンドンでは荒地地であるヒースなどが、市民に緑地を提供している。これらをひとつずつ調べた本がある。
- ・黒く塗りつぶしたのが公園・緑地だが、この黒いところの密度が左半分と右半分では大きく違う。左半分はバッキンガム宮殿やハイドパークがある上流階級の居住区で公園・緑地が非常に多いのがわかる。この左半分の

状態が郊外の原形、出発点となる。右半分は元々ロンドンの下町である。郊外のモデルは、緑の中の大きな屋敷があるというものである。これをロンドン市民に提供するというムーブメントの中から郊外という発想が出てきた。ロンドンの外周部分にグリーンベルトがあり、意図的に都市計画で作ったもの。このグリーンベルトに沿って、緑と水と住まいを用意して、公共交通の仕組みを発達させる。さらにその外部にニュータウンを建設する。20世紀の前半のことである。郊外とは、ロンドンの東の住民の人たちに緑と水を提供する社会改良運動と結びついて出て来た概念である。

●緑と水と住まいによる「郊外型まちづくり」への期待

- ・一宮の中心部には駐車場が多いが、借り手がなくなったら、市が間に入って、所有権は取らずに借りて緑地にすることが考えられる。それを目当てにして新しい産業が入ってくる。新しい産業とは何か。ものづくりは終わった。低賃金労働でものをつくって海外に輸出するのは難しい。これからは、レベルの高いサービス関連である。
- ・イギリスのシェフィールドで成功しているのは高等教育と高次医療であり、それを全世界に売っている。街全体を緑にすることによって成功した。シェフィールドの人口は50万人。商店街は一宮よりはるかに粗末である。そこに、高等教育と高次医療のベーシックインダストリーをつくった。ノンベーシックインダストリーでは限界がある。さて、一宮であるが、ベーシックインダストリーを繊維に拘るのか。そうではなく、環境に注目して日本の都市の中でいち早く、水と緑を軸にして新しい産業を誘致するか。

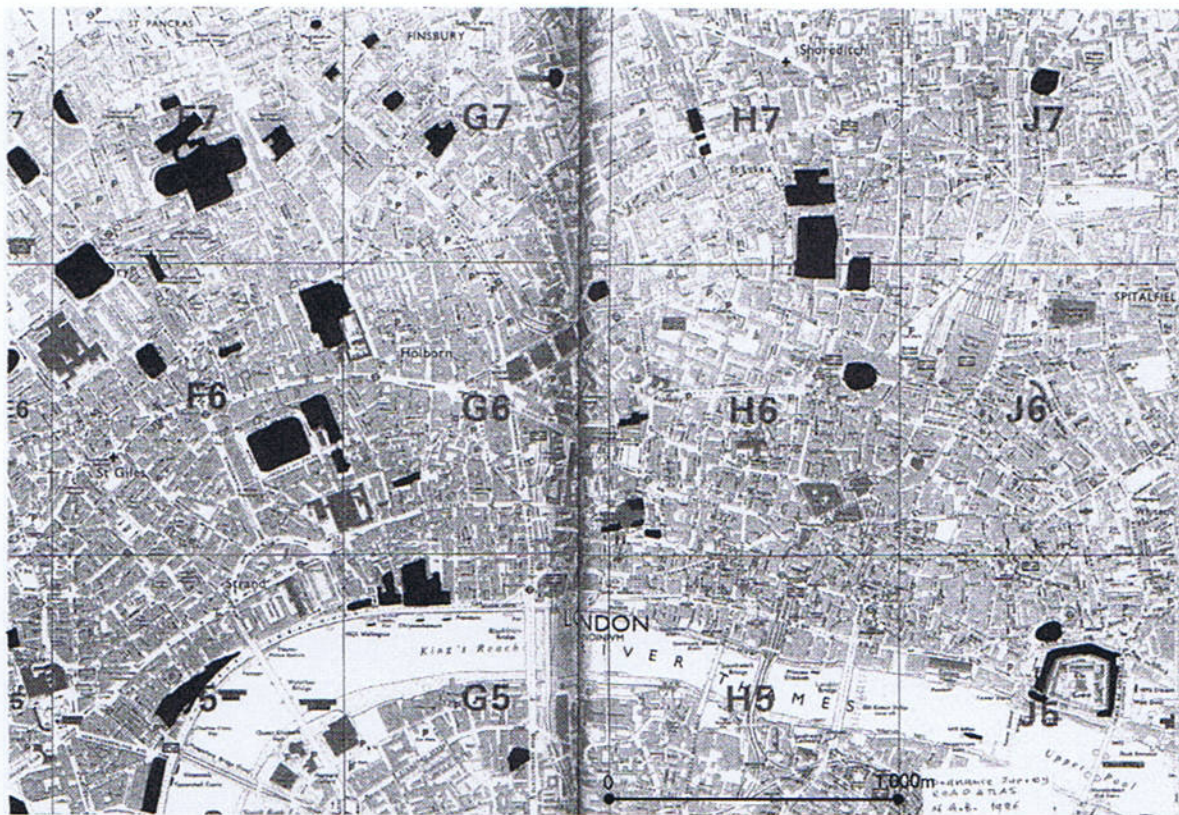


fig.16 ロンドン中心部の緑地・公園

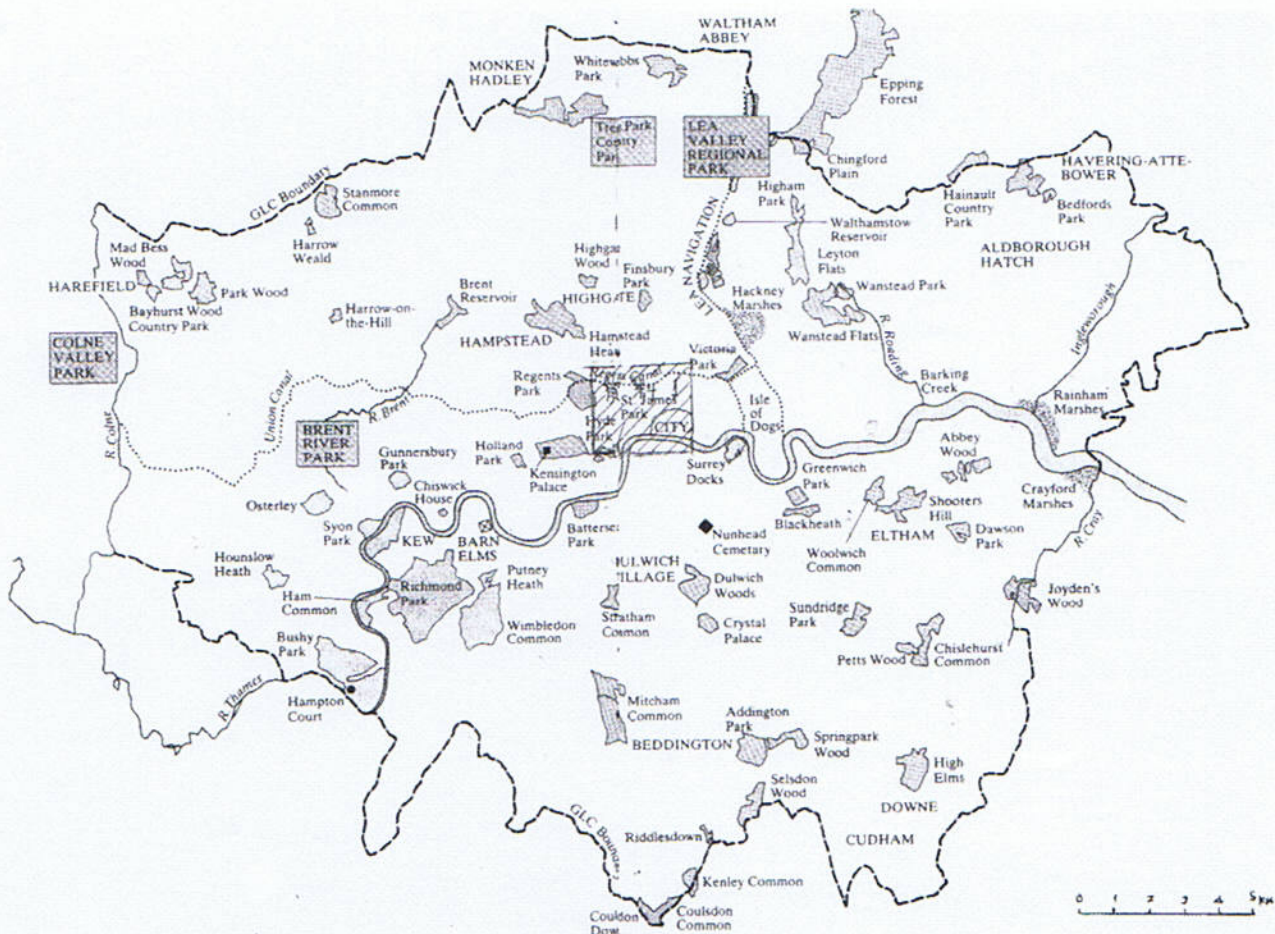
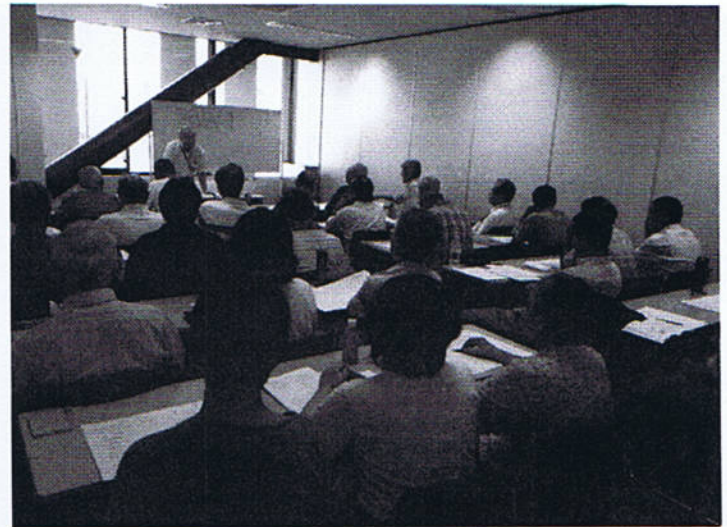


fig.17 ロンドン全体の緑地・公園

●地歴学講座 2013

「伊藤喜栄塾・地歴学講座」とは、一宮市のご出身で、経済地理学の泰斗、伊藤喜栄先生の提唱される、地理学と歴史学を統合した「地歴学」を通して、グローバリズムの席卷する中、わが国の混迷する社会の状況を認識し、これからの地域のあり方を学ぶ連続講座です。2013年度には、一宮市周辺だけでなく、東北、東京、関西等を含め、総勢60名に及ぶ方々のご参加をいただきました。

第1回：2013. 6. 8	テーマ：「地歴学」について
第2回：2013. 7. 13	テーマ：現代日本の地域問題と一宮① ー歴史から学ぶー
第3回：2013. 8. 10	テーマ：現代日本の地域問題と一宮② ー将来を展望するー
第4回：2013. 10. 5	テーマ：前期総括
シンポジウム：2013. 11. 2	テーマ：一宮で産業とコミュニティの連携による地域再生を考える
第5回：2013. 12. 14	テーマ：「コミュニティ」について
第6回：2014. 2. 15	テーマ：「郊外」について
第7回：2014. 3. 8	テーマ：後期総括



会場：iビル（尾張一宮駅前ビル）3階
一宮市市民活動支援センター会議室

【講師：伊藤喜栄】

1931年一宮市生まれ。名古屋大学大学院修了後、大分大学、名古屋市立大学、金沢大学、慶応義塾大学、神奈川大学等で助教授・教授を歴任。経済地理学、歴史地理学、地域政策論を専門とし、「地歴学」を提唱。『図説日本の生活圏』、『教養としての地歴学—歴史のなかの地域』など著書多数。

●コーディネーター：今枝忠彦

1957年一宮市生まれ。1983年名古屋工業大学大学院（建築学）修了後、(株)都市計画設計研究所で、全国各地の都市計画・まちづくりの計画策定に従事。2010年、イズムワークス設立。2007年、中心市街地活性化診断・助言事業検討委員（経済産業省）として一宮市を担当。著書に『街は要る』等。

●共催：NPO 法人志民連いちのみや